

I-49 十二指腸潰瘍穿孔に対する肝円索パッチ術—術後成績について—

東京都立大久保病院 外科

高松 督、桑原 博、工藤敏文、菅野範英、丸山道生、江渕正和

【目的】十二指腸潰瘍穿孔に対し、肝円索による単純被覆術（以下、肝円索パッチ術）をおこなってきたが術後の経過について検討したので報告する。

【対象及び方法】1993年8月から97年2月までに経験した十二指腸潰瘍穿孔症例は23例で、全例に肝円索パッチ術をおこなった。このうち術後6ヶ月以上経過観察が可能であった13例を対象に、抗潰瘍剤の内服の状況、潰瘍の再発の有無、食事摂取量、狭窄症状等の有無について検討した。

【結果】13例のうち、術後6ヶ月以降に内視鏡検査をおこなったのは9例で、潰瘍の再発を5例にみた。このうち抗潰瘍剤の内服を中止していたのは4例であった。食事摂取量は全例で術前と同程度であり、狭窄症状などを訴えたものもなかった。

【結語】術後経過の検討から肝円索パッチ術は有用な手術法であると思われたが、潰瘍に対する根本的な治療ではないため、長期の経過観察と抗潰瘍剤の継続投与が必要であると思われた。

I-50 胃・十二指腸潰瘍緊急手術例の検討

富山医科薬科大学第2外科¹⁾、同看護学科²⁾

榎原年宏¹⁾、坂本 隆、井原祐治、田内克典、清水哲朗、斉藤光和、藤巻雅夫、田沢賢次²⁾

「目的」消化性潰瘍に対する外科治療の適切な選択と実施に向けて、当科で経験した消化性潰瘍手術例について緊急手術例を中心に検討した。

「対象」1996年12月までに当科で手術が施行された消化性潰瘍症例は79例で、そのうち、緊急手術例は42例(53.2%)であった。

「結果」手術件数の年次推移をみると、待期例では82年以降減少し、緊急例のうち出血例においても、近年減少傾向にあると思われたが、穿孔例は減少傾向はなかった。待期例で潰瘍歴のあった症例は81.1%に対し、緊急例では47.6%と約半数にすぎなかった。術前合併症を認めた症例は、待期例で10.8%に対し、緊急例では47.6%と高かった。緊急手術例の手術死亡は9.5%であり、全例重篤な術前合併症を有していた。穿孔部閉鎖術後の再発は30%に認められたが、全例現在まで潰瘍合併症の発生を見ていなかった。

「まとめ」潰瘍歴、術前合併症、再発後の経過などからみて穿孔性潰瘍に対し、穿孔部閉鎖術式を第一選択とすることは妥当と思われた。

I-51 胃・十二指腸穿孔例の検討

新潟こばり病院外科¹⁾、横須賀市民病院外科²⁾

加藤清り、親松学り、石川貞利²⁾

【目的】胃・十二指腸穿孔の手術例と保存療法例を比較検討し、その問題点について検討する。

【対象・方法】1993年1月より1996年12月までに当科で経験した胃・十二指腸穿孔28例を対象とし臨床的事項について検討した。【結果】基礎疾患は十二指腸潰瘍23例、胃潰瘍4例、胃癌疑い1例であった。男性25例、女性3例で平均年齢は44.3歳であった。治療は手術18例、保存療法10例であった。発症から来院までは平均9.8時間で、保存療法群は4.2時間であった。手術群は発症から21時間で手術をうけていた。平均入院期間は手術群23日、保存療法群で16日であった。退院後治療中断は手術群では23%で、保存療法群で60%であった。保存療法群の2例に潰瘍再発を認め1例が再穿孔した。【結論】胃十二指腸穿孔28例を経験した。45歳以下の症例が17例(60.7%)で全例男性の十二指腸潰瘍穿孔であった。保存療法群では退院後治療中止の傾向が高かった。保存療法例では十分な説明と退院後の厳重な経過観察が必要である。

I-52 十二指腸潰瘍穿孔に対するStrategy

～保存的治療か、外科的治療か～

池友会 小文字病院 外科

山本明、久留哲夫、石橋照三、鶴崎直邦、赤岩道夫

【目的】多様化する十二指腸潰瘍穿孔に対する治療法のStrategyを考察する。【対象】平成6年1月から平成8年12月までに当院で治療をうけた十二指腸潰瘍穿孔18例を対象とした。【方法】保存的治療をうけたもの10例、外科的治療法をうけたもの8例（開腹大網充填術7例、広範囲胃切除術1例）であった。保存的治療は、入院後絶飲食とし経鼻胃管を挿入、輸液・抗生物質・抗潰瘍剤にて管理する外科的治療法が選択された場合には、入院当日に開腹術がおこなわれた。【結果】保存的治療をうけたもの10例（以下A群）の平均在院日数は19.7日であり、開腹大網充填術を7例（以下B群）の平均在院日数は22.3日であった。食事摂取開始日は、A群は入院後平均9.9病日、B群は術後8.2病日であった。平均年齢はA群は39.8歳（18～72歳）、B群は39.0歳（15～53歳）であった。【結論】十二指腸潰瘍穿孔に対する治療の原則は、急に発症した腹膜炎に対処するものであり、当院では以上のStrategyをもとに保存的治療か、開腹大網充填術かを治療法に選択しているが、平均在院日数・食事摂取開始日に有意差はなかった。